

屋敷といひ、萬治四年四月廿六日米出村光壽寺由來書に押水庄内小川村とあるから、三箇の庄の惣名を押水庄といつたと見える。

オシミツナカノシヨウ 押水中ノ庄 羽昨郡に屬し、藩政時代では、北川尻・冬野・坪山・正友・紺屋町・東間・東野・御館・三日町・上田・上田出・中野・山崎・寶達の十四ヶ村を含んで居た。

オシミヅノキ 押水井 羽昨郡紺屋町にある。寶曆の書上に、『紺屋町村領押水清水。此清水郷庄之名の起本にて則押水大海庄と申傳候。』とある。

オシヤリザン 御舍利山 白山の別山の頂上から北に途を取つて御前岳に向かふときは、すぐ標高二三八〇米許の山がある。それを御舍利山といふ。

オシロイヤキ 白粉燒 加越能銘記に金澤之名物を列擧したうちに、『大樋之瓦、淺野、燒物、同白粉燒。』とある。河北郡淺野村で鉛を燒いて白粉を製したことをいふのである。

オシロウシロマチ 御城後町 ↓ウシロマチ 後町。

オシロカタ 御城方 加賀藩では年寄二人を以て、一切城廓に關することを主任せしめ、それを御城方主附といふた。

オシロギン 御城銀 藩の公庫に藏する銀子をいふ。御城銀を藩士に貸附してその利子を收めたことは、國事雜抄所載明曆元年十一月二十日附の文書に見え、銀座武兵衛がその取扱をなし、利子は年一割半であつた。又御城銀を拜借する人々に差出さしめた寛文二年の誓詞も同書に載せられてゐる。

オースボン 明治二年八月金澤藩に聘せられた米國人で、七尾語學所に於いて英語を教授したが、三年語學所の金澤致遠館に合併するに及んで之に轉じ、八月契約の期滿ちて解雇せられた。オースボンの職俸は、一ヶ月百五十弗であつた。

オスマヒ 御住居 前田齊泰の夫人は將軍徳川家齊の女であつたが、その居る所を御住居と稱し、隨つてその夫人をもしかいうた。『住居の内々拜受之品』など、あるのは、この意味である。後齊泰の權中納言に昇るに及んで、御守殿と稱することを許された。又世子などの居で、御殿といはぬものを御住居といふたこともある。

オソシサマダイモク 御祖師様題目 羽昨郡で、日蓮宗の信者が、冬季毎夜交番に營む御講をいふ。

オソバマハリ 御側廻 藩主に直接近侍する諸士で、御側用人とも御近習御用人とも御次廻ともいひ、藩末の頃は次に記す者が之に屬してゐた。御用部屋四人、内一人は人持組から出た。奥取次四五人、御近習頭中から之を勤めた。配膳役八人、表小將から勤めた。御近習勤仕十六人、平士から勤め、以前は御居間方と稱したもの。その他御茶堂一人があつた。また御近習勤仕中に頭取四人を置く。外に頭重を置き、頭取と共に勤めしめたこともある。

オダイク 御大工 藩の建築に従事する大工棟梁で、御作事奉行に屬する。早くその姓名を傳稱するものは橋本惣右衛門・木村源左衛門・栗林太右衛門・三宅四郎左衛門・中島甚左衛門、其の外舟木三郎兵衛・影山善兵衛・清水九左衛門・栗林仁左衛門・馬川七郎左衛門の

十四人で、いづれも前田利家から利常時代までの輩であるといふ。寛永初年以來御切米五十俵・五十五俵、或は六十俵を歲俸とした。

オダイクガシラ 御大工頭 寶永五年七月朔日大西平右衛門・安田八郎右衛門の兩人に命ぜられ、階級は與力の下、御歩の上と定められ、御目見を仰付けられ、帶刀を許された。次いで元文二年九月羽田十郎右衛門が命ぜられて三人となり、以來歲俸六十俵或は七十俵を受けた。寶曆十一年九月篠田覺右衛門・安田吉郎右衛門罷免の後中絶したが、安永二年二月十八日西田三郎右衛門・田邊久之丞之に任じ、文化七年十一月二十五日井上庄右衛門が命ぜられるに及んでまた三人となつた。

オダイクトウドリヤク 御大工棟取役 寶曆十一年十二月西田三郎右衛門・田邊久之丞は御大工棟取役を命ぜられ、御大工頭の跡役に任じたが、安永二年二人共に御大工頭に進んだ。

オダイクナミ 御大工並 黒川六助に切米五十俵を賜はつて御大工並に任じ、大工肝煎を勤めたといふが、これは前田利常の初期以前のことである。その後もあつたのであらうが詳かでない。安永八年正月十三日澤早忠平が亦之に召抱へられ、切米三十五俵を受けて御細工者に補した。

オタオリベ 織田織部 織田有樂の二男河内守長孝の三子。初め左近。前田利常に仕へて三千石を領し、後前田利治に従ひて大聖寺に往き、承應二年金澤に還され、明曆三年江戸に歿した。その子も亦織部と稱したが二千五百石を襲ぎ、延寶元年歿した。

オダガメ おだがめ 藩政の時金澤乗物屋小路の角、乗物屋の家腰に往來人のため便所を設けてあつたが、之を世人おだがめと稱した。麻病を患へる者がこゝに花を手向けて用を足せば必ず平癒するといはれ、その余快した者から繪馬などの額を掛けてあつた。乗物屋の退去した後その家は風呂屋となつたが、尙この便所があり、前記の慣習も絶えなかつた。

オタカラグラ 御寶藏 白山記に翠の池のことをいうた次に、『池上一箇云稲倉峰。或云大師縛石。』とあるは、金子有斐の白山史に『其岡背有孤巖。時五六丈。横十四五丈。俗曰寶藏。此巖下動有寶石。』といふものと同じく、いづれも今いふオタカラグラのこと

で、御前岳と大汝岳との間の一巖角である。又白山遊覽圖説に異考記を引用して、寛喜二年六月白山の麓に雪降り、七日を經ても消えなかつた爲に、嘉穀悉く凋落し、西收の時に至つて編戸手を空しくして饑に逼つた。この際尸祝下部良暢は家産を傾けて窮民を救つたが、財力遂に及ばなかつたので、白嶽に登り寶藏に至つて祈つた所、各村の竹林皆實を結んで、饑民爲に死を免るゝことを得たとのことが記されてゐる。良暢のこゝに祈つたのも稻倉といふ名があつたればこそと思はれる。後世に至つて詣拜の人々、稻倉ぐらゐでは薄足し得ず、遂に寶藏にしまつたのだらう。

オタタミサン 御靈刺 藩の靈職の者をいひ、御作事奉行の支配であつた。前田利家の時山田藤兵衛之を勤め、延寶八年十月には若林彌左衛門・寺田彌右衛門が召出されて十石充を賜はつた。又貞享元年松村市郎右衛門を召出して二十俵を與へられたが、その以後の

ことをいうた次に、『池上一箇云稲倉峰。或云大師縛石。』とあるは、金子有斐の白山史に『其岡背有孤巖。時五六丈。横十四五丈。俗曰寶藏。此巖下動有寶石。』といふものと同じく、いづれも今いふオタカラグラのこと

で、御前岳と大汝岳との間の一巖角である。又白山遊覽圖説に異考記を引用して、寛喜二年六月白山の麓に雪降り、七日を經ても消えなかつた爲に、嘉穀悉く凋落し、西收の時に至つて編戸手を空しくして饑に逼つた。この際尸祝下部良暢は家産を傾けて窮民を救つたが、財力遂に及ばなかつたので、白嶽に登り寶藏に至つて祈つた所、各村の竹林皆實を結んで、饑民爲に死を免るゝことを得たとのことが記されてゐる。良暢のこゝに祈つたのも稻倉といふ名があつたればこそと思はれる。後世に至つて詣拜の人々、稻倉ぐらゐでは薄足し得ず、遂に寶藏にしまつたのだらう。

を設けてあつたが、之を世人おだがめと稱した。麻病を患へる者がこゝに花を手向けて用を足せば必ず平癒するといはれ、その余快した者から繪馬などの額を掛けてあつた。乗物屋の退去した後その家は風呂屋となつたが、尙この便所があり、前記の慣習も絶えなかつた。